

# I 物語文を読む

## 第一回

1

(この物語は、芥川龍之介作「蜘蛛の糸」です。お釈迦様やカンダタの気持ちになって読んでいきましょう。)

ある日のことでございます。お釈迦(しゃか)様は極楽(ごくらく)の蓮池(はすいけ)のふちを、独(ひと)りでぶらぶらお歩きになっていらっしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊(めしべ)からは、なんともいえないよい匂いが、絶え間なくあたりへ溢(あふ)れております。極楽はちょうど朝なのでございましょう。やがてお釈迦様はその池のふちにおたたずみになって、水の面をおおっている蓮の葉の間から、ふと下の容器(ようす)をご覧になりました。この極楽の蓮池の下は、ちょうど地獄の底に当たっておりますから、水晶のような水を透き通して、三途の河や針の山の景色が、ちょうどどのぞき眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

### 〈今日の学習のポイント〉

表現を味わったり、登場人物の気持ちを想像したりして読んでいきましょう。

#### 〈基礎トレーニング〉

① 声を出して読んでみましょう。

② 次の言葉の意味を辞書で引いて調べてみましょう。

・ たたずむ

・ 水晶のような水

③ お釈迦様は、どこで、どうしていらっしやいますか。

・ どこで

・ どうしているか。

④ お釈迦様は、地獄の底に何をごろんになりましたか。

## 〈補充トレーニング〉

するとその地獄の底に、カンダタという男が一人、ほかの罪人と一しよにごめいている姿が、お眼にとまりました。このカンダタという男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊（どろぼう）でございますが、それでもたった一つ、善いことを致した覚えがございます。と申しませぬのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛（くも）が一匹、路ばたを這（は）ってゆくのが見えました。そこでカンダタは早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものにちがいない。その命をむやみにとるということは、いくらなんでも可哀そうだ。」と、こゝろ急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

お釈迦様は地獄の容子をご覧になりながら、このカンダタには蜘蛛を助けたことがあるのを思い出しになりました。そうしてそれだけの善いことをした報（むく）いには、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。幸い、側（そば）を見ますと、翡翠（ひすい）のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけております。お釈迦様はその蜘蛛の糸をそっとお手にお取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお下ろしなさいました。

① 声を出してよんでみましょう。

② 次の文は、どのような様子を表しているのか、自分の言葉で書いてみましょう。

・翡翠のような色をした蓮の葉

・玉のような白蓮の間から

③ お釈迦様は、なぜ蜘蛛の糸をカンダタに向けてお下ろしになったのでしょうか。

## 〈向上トレーニング〉

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しよに、浮いたり沈んだりしていたカンダタでございます。なにしろどちらを見ても、まつ暗で、たまにそのくら暗（やみ）からぼんやり浮き上がっているものがあると思えますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらございます。そのうえあたりは墓の中のようにしんと静まりかえって、たまに聞こえるものについては、ただ罪人がつく微（かす）かな嘆息（ためいき）ばかりでございます。これはここへ落ちてくるほどの人間は、もうさまざまな地獄の責め苦（せめく）に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございます。ですからさすが大泥坊のカンダタも、やはり血の池の血に咽（むせ）びながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいておりました。

- ① ② 声を出して読んでみましょう。

- ③ 言葉の意味を辞書で引いてみましょう。  
・嘆息

・責め苦

・咽びながら

- ④ カンダタは、「地獄の底の血の池」にいますが、「地獄の底の血の池」はどのような様子ですか。その様子を書いてください。

## 〈基礎トレーニング〉

ところがある時のことでございます。なにげなくカンドタが頭を挙（あ）げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天井から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上に垂（た）れてまいるではございませんか。カンドタは、これを見ると、思わず手をうって喜びました。この糸にすがりついて、どこまでものぼってゆけば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違（そうい）ございません。いや、うまくゆくと、極楽へはいることさえもできましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございません。

こう思いましたからカンドタは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことでございますから、こういうことには昔から、慣れきっているのでございます。

しかし地獄と極楽との間には、何万里となくございますから、いくら焦（あせ）ってみたところで、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼるうちに、とうとうカンドタもくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまうました。そこでしたかたがございませぬから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下がりながら、遥（はる）かに目の下を見下ろしました。

① 声を出して読んでみましょう。

② カンドタの気持ちを表している文に線を引いて、順番に書いてください。

③ カンドタの気持ちになって読んでみましょう。

(ここでは、前のページの文章から問いを出しています。)

〈補充トレーニング〉

- ① 次の文の意味を辞書で引いてみましょう。  
・手をうって喜びました。

・相違ございません。

・たぐりのぼり始めました

・何万里

・遥かに

- ② 「カンダタは、これを見ると思わず手をうって喜びました。」とありますが、これとは何ですか。また、これを見た時のカンダタの気持ちができるだけ詳しく書いてください。

「これ」とは何か

カンダタの気持ち

(ここでは、2ページ前の文章から問いを出しています。)

〈向上トレーニング〉

① もう一度、カンダタの気持ちや様子を想像し、強弱をつけながら読んでみましょう。

② 「遙かに目の下を見下ろしました。」とありますが、その時、カンダタは、どんなことを思ったのでしょうか。想像して書いてください。

③ 第一回①から第二回までの文章を読んで、どのようなことを感じましたか。感じたことを書いてください。